

平成 29 年 北農賞

(昭和 15 年創設 第 78 回)

報文：北海道における有機栽培ばれいしょの安定生産技術

(北農 79 巻 第 1 号、82 巻 第 3 号、84 巻 第 2 号掲載)

田村 元、清水基滋、加藤 淳、中津智史、竹内晴信、角野晶大 殿

(地方独立行政法人 北海道立総合研究機構十勝農業試験場)

(地方独立行政法人 北海道立総合研究機構中央農業試験場)

(1)有機農業は、農業の自然循環機能を大きく増進し、環境への負荷を低減する生産方式として、国はその推進を図っている。また、有機栽培農産物には社会的に強い関心と根強い需要があることから、北海道においても各地で取組の拡大と普及・定着が進みつつある。北海道の有機 JAS は場面積は全国で最も大きく、種類では野菜類が大半を占めており、その中でもばれいしょの栽培面積が大きい。

しかし、近年は有機栽培面積の伸びが鈍化しており、生産面での最も大きな課題として栽培技術習得の難しさが挙げられている(「北海道有機農業推進計画(第3期)」平成29年3月)ことから、農業者が容易に取組めるような有機農業技術の開発・普及の促進が求められている。

(2)筆者らは、ばれいしょ有機栽培の現地調査や生産者からの聞き取り調査により、生産の不安定要因や多種多様な有機質肥料の施用が手探りで行われている実態について明らかにした上で、これら技術的問題点の解決に取り組んだ。まず始めに最大の低収要因であるジャガイモ疫病について、収量や品質に与える影響と品種選択の効果を明らかにした。次に有機質肥料の種類と施肥方法について検討を行い、窒素の無機化と窒素吸収量、ばれいしょの収量、品質から窒素無機化速度が速い資材を施肥標準に準じて施用することが安定性を高めることを明らかにした。更に JAS 有機で使用可能な資材のジャガイモ疫病に対する防除効果を検討し、慣行栽培とほぼ同程度の収量が確保できる防除方法を明らかにした。

(3)これらの成果は、ばれいしょ有機栽培における品種選択、有機質肥料の施用法、病害の防除方法を組み合わせた技術として示され、生産者がすぐにでも応用可能な実践的な内容で成績がまとめられている。現在、有機栽培を行っている生産者並びに今後有機栽培に取り組もうとする生産者にとって有益となる知見であり、有機栽培の進展に大きく貢献するものであり、北農賞に値する。